

《巻頭言》

創刊50周年を迎えて

片 山 勝 茂

基礎教育学コース事務室の一角の本棚に、『研究室紀要』が創刊号から並べられている。第40号（2014年7月）の「巻頭言」は川本隆史コース主任（当時）が執筆されているが、そこでは節目の年の巻頭言の読み直しが行なわれている。私自身、創刊50周年という節目の年にあたって創刊号から前号（第49号）までの巻頭言と目次に目を通してみた。すると、節目の年ごとに研究室の歴史を振り返る企画が行なわれており、史料としての価値にあらためて目を開かれる思いがした。歴史を振り返る企画には例えば、第10号（1984年6月）の座談会「史哲研究室10年をふりかえる——史哲における新たな教育学をめざして——」、第25号（1999年7月）の「座談会——教育学コースの‘これまで’と‘これから’——」、第35号（2009年3月）の「教育学研究室年譜」、第36号（2010年6月）の「共同討議 基礎教育学コースの「これから」」といったものがあり、ぜひ一読をお勧めしたい。なお、第10号が創刊10周年になっており、本号（第50号）が創刊50周年となっているのは、創刊号（1974年10月）から第4号（1977年12月）まで毎年1号発行されていたものの、1978年は発行されておらず、第5号（1979年6月）以降、毎年1号発行されてきたからである。

本号においても、節目の年の企画として、第30号以降の『研究室紀要』の総目次を掲載するとともに、博士論文一覧（2014～2022年度）と修士論文一覧（1999～2022年度）を掲載している。すでに第30号（2004年6月）に『研究室紀要』創刊号から第29号までの総目次が掲載されており、また第25号（1999年7月）には博士論文・修士論文一覧（1954～1998年度）が、第40号には博士論文一覧（1999～2013年度）が掲載されている。そのため、本号に掲載している『研究室紀要』総目次（第30号～第49号）と論文一覧はそれらを補完するものとなっている。

本号にはまた、特別企画として、2024年3月末で退職される田中智志教授と小玉重夫教授の略歴・研究業績一覧と、2024年3月20日に行なわれた拡大総

合演習での両教授の講演内容も収録されている。こちらもぜひ一読をお勧めしたい。

2024年4月より、本コースは基礎教育学コースから教育学コースへと名称変更し、組織運営を開始することとなっている（これまでのコース名称の変遷については詳しくは、東京大学大学院教育学研究科・教育学部のホームページに掲載の「大学院の変遷／講座および学部学科の変遷」を参照されたい）。ただし、2026年3月31日までは基礎教育学コースとして学生の受入を継続し、教育学コースとして学生受入を開始するのは2026年4月1日以降である。教員組織やカリキュラムの変更はなく、単純な名称変更である。記録に残すため、名称変更の理由をここに記しておきたい。

もともと本コースは長く「教育学」という名称を（大学院は2009年3月まで、学部は2010年3月まで）使用してきたが、教育学研究科・教育学部全体での専修制への組織再編・名称変更の段階で「基礎教育学」という名称に変更された。その際、第35号の「教育学研究室年譜」に書かれているように、従来の教育学コースは「総合教育科学専攻教育創発学コースの一部と合併の上、総合教育科学専攻基礎教育学専修基礎教育学コースとして再編され」、教育学コースが「担ってきた「教育哲学」「教育人間学」「教育史」の専門分野に加えて、教育創発学コースからは「教育臨床学」という分野が加わること」となった。

「基礎教育学」の正式な英文名称が“Basic Theories of Education”となっていることから分かるように、「基礎教育学」という名称は旧教育職員免許法施行規則の「教育の基礎理論に関する科目」という名称を踏まえて創られたものである。しかしながら、「基礎教育学」という名称が独自のもので一般的ではないため、教養学部1・2年生や大学院進学希望者にとってコースの教育研究内容がイメージしにくいものとなってしまうていた。例えば、「基礎」という部分だけが勝手に独り歩きして、基礎教育つまり初等教育（小学校教育）に係る教育

研究を限定的に行なっているコースと誤解されることもあった。そして、教育職員免許法施行規則の改正に伴い「教育の基礎理論に関する科目」という名称ももはや使われなくなってしまっている。「教育学」という名称は従前に本コースが用いていた伝統的な学問分野の名称であり、変更により、本コースの教育研究内容がよりイメージしやすいものとなる。以上の理由から、専修名及びコース名の変更を行なうものである。

2024年4月以降の「教育学コース」の正式な英文名称は、従前のものを踏まえて、“Division of History and Philosophy of Education”となる。『研究室紀要』の裏表紙で確認すると、“History and Philosophy of Education”という英文名称は第21号（1995年6月）から第35号まで使われている。それ以前、裏表紙に英文目次が掲載されるようになった第17号（1991年6月）から第20号（1994年6月）までは“Education History and Philosophy”という名称が用いられている。いずれにおいても“Philosophy”よりも“History”が先に来ている（史哲の順になっている）のは、『研究室紀要』の発行者が創刊号から第11号（1985年6月）まで「東京大学教育学部 教育史・教育哲学研究室」となっていたことと符合している。ただし、第12号（1986年6月）から第20号までの発行者は「東京大学教育学部 教育哲学・教育史研究室」となっており、第21号から第35号までは「東京大学大学院 教育学研究室」となっている。第36号（2010年6月）から本号（第50号）までは「東京大学大学院 基礎教育学研究室」であるが、次号（第51号）からは再び「東京大学大学院 教育学研究室」となる予定である。

「基礎教育学コース」という名称は教育学研究科・教育学部内では一定程度浸透しており、学生も教職員もしばしば「キソキョウ」という略称を用いてきた。「基礎教育学コース」となる前の「教育学コース」の時代には、コースの歴史的経緯と伝統から「史哲」という略称が用いられていたようだが、今後の新しい「教育学コース」の略称はどうなるだろうか。「キョウイク」という言い方がありえるが、それだと「教育学研究科・教育学部」の略称としての「キョウイク」との区別がつきづらい。2026年3月までに進学又は入学し、引き続き在学する学部生・大学院生は基礎教育学コースに所属することになるため、しばらくは「キソキョウ」の略称も継続して使用さ

れることが十分予想される。ひょっとすると、「教育学コース」の名称が再び変更される機会がおとずれるまで、「キソキョウ」の略称が用いられつづけるのかもしれない。